| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 堤　涼子（ﾂﾂﾐ　ﾘｮｳｺ） |
| 学位の種類 | 博士（芸術） |
| 学位記番号 | 甲第61号 |
| 学位授与日 | 平成27年3月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 論文題目 | ニワ文化のデザイン論<br>ー生活における人の動きと空間構成の関係からー |
| 審査委員 | 主　査　　教　授　　須永　剛司 |
| | 副　査　　准教授　　濱田　芳治 |
| | 副　査　　京都造形芸術大学環境デザイン学科教授　　尼﨑　博正 |
| | 指導教員　　教　授　　岸本　章 |

## 内容の要旨


日本の村落を訪れると、住まいと田畑や海、山が合わさり美しい景観を織り成している。これらの生活における屋外空間(ニワ)を、気候や地形などを巧みに読んだ「生活者によってデザインされた環境」として捉えてみたい。デザイン(design)という語は、日本において曖昧に使用されている語であり、装飾や意匠とみなされる傾向にあるが、本来はその実践をも含めた計画である。本研究では、生活者が実用や目的をもって形づくった環境もまたデザインであることを明らかにし、そのデザイン論を組み立てることがねらいである。その枠組みとしてニワにおける「人の動き(action)」と「空間構成（space composition)」の関係性を実例により捉え、それを分析し考察する。

古代におけるニワは平坦な場所を指し、儀式を行う場、人々が共同で作業を行う場であった。しかし、近代において「庭園」の語の登場で、ニワ(庭)とソノ(園)が混同されていく。一方で、民俗語彙のなどから見られるように、生活のなかの日常的側面(ケ：褻・毛・気)と非日常的側面(ハレ：晴)のいずれにおいても、ニワの語は脈々と息づいていたのである。

このことから、日常と非日常の両側面からニワの事例をとりあげ、そのあり方を検証した。まず、日常的側面の事例に設定した指標がエリア区分である。エリア区分については生活者を対象にした聞き取り調査から、「作業場(yard)」、「庭園(garden)」、「前栽畑(vegetables plot)」、「屋敷林(protective grove)」に分けた。これらにより、用途に適った空間を造りその配置を行い、気候・地理や生業・家格などに対応したあり方を見出した。次に、非日常的側面の事例から、動線に着目し、そのあり方を検証した。儀礼・祭祀、芸能は「作業場」と「屋敷林」のエリア区分にて行われ、神聖な場へと意味を転換させ、なかでも「作業場」は私的空間から公的空間へと役割を転換させていることが見出された。

ニワを「生活者によってデザインされた環境」と読み解くことで、地形や気候などの地理的条件や生業や家格などの社会的条件、信仰心や住意識などの個人的条件が要因(factor)となりデザインされていることが見出された。また、民俗学で論ぜられてきた住まいの屋内空間を分析する概念である「オクークチ」の秩序が、屋外空間においても踏襲されており、ニワは生活者によって屋内空間と連続的に計画されていることも見出された。またさらに、日常的側面と非日常的側面は生活の「ケ」をリセットする「ハレ」とされてきたが、ニワを形づくるデザイン行為を持続的に行うための変更や修正のタイミングをそこに設けていたとする知見も見出すことができた。

生活者によるニワの「デザイン(形づくる行為)」は、時の流れを内包した持続的なデザインであった。つまり、ニワに対し意味の転換を起こしていた原動力、そしてニワの価値をもたらすための持続的な管理を駆動する力こそがニワ文化であると結論づけることができた。私達は、生活者のデザインに意味と価値を見出すからこそ、それらが美しいと感じられるのである。本研究で明らかにしたことは、生活者が営みのなかで自らの環境を形づくることを尊重したニワのデザイン論である。これらは新たな環境デザインの指標となり得ると考えられる。本研究の所産を今後の環境デザインの実務に反映させることを次なる研究課題としたい。

## 審査結果の要旨

堤涼子さんは本学博士前期課程を修了後、京都にある老舗の造園会社に勤務し造園設計の実務および研究業務を経験した後に博士後期課程に進学した。本論文は博士前期在学中から関心を持っていた、デザイナーの手によらない外部環境のデザインに関する集大成であり、また今後、堤さんのライフワークになると思われる壮大なニワ文化研究の出発点とも言える内容である。

本論文のテーマは農村風景を見て美しいと感じたことがきっかけになっている。それは樹木や畑など植物で溢れている風景だが、原生林のような人の手が入らない自然の美しさとは異なり、人が長い年月をかけて作り続けてきた風景である。それらがどのようにして作られ、どのように維持されてきたかを解明したいという思いから始まっている。そこに関わってきた人の行為をデザインという視点から論ずる試みである。

最初にこの屋外空間を何と呼ぶかを第１章の中で考察している。ニワという言葉がどこまでを指すかは、時代により、状況によりさまざまで、屋外空間の使われ方と名称の関係を多分野の先行研究から調査している。かつては「ニワ（庭)」と「ソノ（園)」が明確に区別されていたが、近代になって garden の訳語として庭と園を合体させて庭園という語になったことから定義が曖昧になってきたという指摘は興味深い。そもそも区別する必要があるときに別の名称を付けるので、その混同は対象に対する意識の変化を表している。

次に第２章で日常的な生業や生活におけるニワの使われ方を調査することで、ニワが「作業場」「庭園」「前栽畑」「屋敷林」の４つのゾーンに分けられることを見つけている。そしてそれぞれのゾーンに関わる人の動きと共に一定の秩序を持って決められてきたことがわかる。またその秩序が屋内空間のヒエラルキーである「オクークチ」の秩序と同じであると位置づけている。土間の内部空間もニワと呼ぶことから、屋外、屋内という区別ではなく、何をする場であるか、どのような意味を持った場であるかで区別する意識があったことがわかる。

第３章では、儀礼など非日常的な使われ方を調査することで、同じ場所がハレとケで意味が変化することを、人の動きと空間構成の関係から明らかにする。日常的な農作業の場であったところが特別の日には神聖な意味を持つようになる。ニワで行われる特別な儀礼は共同体がその意味を共有することによって、見えない境界線と共に特別な場が設えられて、また継続的に改変されてきたことがわかる。

第４章では、ニワを作り維持する行為をデザイン行為としてとらえて解明していく。地理的、気候的、文化的要因などからくる空間構成と、その空間と人の動きとの関係から、どのような条件下でどのようにしてニワが作られるかについて分析している。その中で、「生活者によるデザインは、デザイン行為と捉えていない無意識のデザインである。」と述べている。無意識であるがゆえに管理不足が起こり、簡単に失われてしまう危うさがあり、環境の荒廃につながるとも言える。無意識に行われてきたデザイン行為を解明することが必要であり、「生活者によるニワのデザインへの理解が、ニワの存続の鍵である」とまとめている。

本論文は以下の 3 つの点において大きな意義がある。

まず今まで研究対象として認識されていなかった分野であるということ。日本において建築界ではすでに 1920 年頃から民家が研究対象となり、以後集落など共に本格的に建築学の研究対象になってきた。一方造園学では名勝庭園のようなアートとしての庭園や、景観は多方面から研究対象となってきていて、特に景観は近年注目されていて、景観の保全に関わる研究が進んでいる。しかし農家が日常的に使用するニワはほとんど研究対象となってこなかった。また、本論文の前提として、デザインとはデザイナーなどのプロが作ったものだけでなく、それを使用する生活者が作ったものも含めてデザインと呼んでいるが、今まで生活者がニワを作る行為をデザインとして論じられることはなかった。この先行研究が皆無ともいえる分野にデザインという新しい切り口で踏み込んでいったことに大きな意義がある。

次に誠実なフィールドワークに根ざした研究であるということ。本論文が対象とするニワには多様な例があり、そのすべてを網羅するのは容易ではないが、平均的なもの、あるいは特徴的なものをピックアップし、時間をかけて調査を重ねている。草加の農家の研究では、緊急民家調査の記録をたよりに、アンケートや聞き取り調査など、民俗学的な手法をとり、現地に通い地に足が着いた研究となっている。またじゃんがら念仏踊りや伊勢大神楽では実際に巡り歩く団体に同行し、その行為、人の動き、空間の利用法に関して詳細な記録をとっている。こうした誠実で膨大なフィールドワークの積み重ねが論文のベースになっているところに価値がある。

そして、失われていく文化への警鐘であるということ。本論文で扱っているようなニワは、気がつかれないままに激減している。建築物のようにわかりやすい形態が見えていることは少なく、また建築物の保存のように機能が変わっても形を残すということが難しく、今まさに消えようとしているニワが多数存在する。近年、登録有形文化財制度による建築物の保存や、文化的景観の制定による生業景観の保存などの動きが見られる。本論文で取り上げているニワはそのどちらとも密接な関係があるが、農家などのニワとしてはまだ保存という動きには至ってはいない。保存できるものは保存しなくてはならないが、生活の変化と共に消えていくのはやむを得ない場合も多い。これらは今記録に残さないと全く知られることなく消えてしまう可能性がある。しかしこの研究で得られた成果は今後の新しい環境をデザイナーがデザインする際に応用できることでもあり、豊かな環境を作るための力にもなる。そこに繋ぐためにも、今でなくてはできない研究としての意義がある。

本論文は、建築学、造園学、民俗学にわたり、横断的、学際的な研究とも言えるが、それぞれの領域から漏れていた分野とも言える。またニワ文化のデザイン論としてまとめただけでなく、この先に広がる研究すべき世界の扉を開けたとも言える。今後の継続的な研究の展開におおいに期待できる内容になっている。環境デザインという言葉は歴史が浅く、それがどこまでを示すか未だ確定されてはいないが、環境デザイン学が「人間が作り出した環境とそれを使う人間の関係を学ぶ」とすれば本論文は極めて環境デザイン的な視点に立っていると言える。その発想はニワだけでなく、民家、街並み、集落など環境すべてにあてはまる。環境や景観の保存というと目に見える形態の保存だけに目が行きがちだが、それだけでなく、人との関わり方の認識が重要である。しかし生活者が環境をデザインしているという意識はまだ少なく、その研究は不足している。またデザイン行為の結果としてデザインされたものが存在するというだけではなく、空間を維持していく行為そのものをデザインと呼ぶという視点も重要である。こうした点からの研究が今後求められるということから、本論文は環境デザイン学にとって問題提起をしているとも言える。また生活者のデザインという視点は他のデザイン分野でもこれから大きく注目されるべきである。以上のような観点を総合し審査委員の総意として、本論文を学位の授与に値するものと認める。

（岸本　章）